

京都大学	博士(文学)	氏名	李 洪 章
論文題目	在日朝鮮人の「民族」をめぐる経験と実践の社会学		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、序章、終章を含めて8つの章から構成される。序章においては、問題の所在、目的と方法、本研究が切り開く地平について説明される。</p> <p>本研究の目的としてもっとも強調しているのは、現代日本社会に生きる在日朝鮮人が形成する多層な経験のなかでも、生活レベルにおける民族経験を詳述することである。朝鮮半島の分断状況や、民族抑圧状況などによって規定される在日朝鮮人の民族的経験のあり方は、きわめて多様化していると言われている。しかし、その経験のあり方を、徹底的に個人に根差して詳細に明らかにしようとした研究の蓄積は十分とはいえない状況にある。こうした状況を踏まえて本論文では、多様な背景をもつ在日朝鮮人個人の語りを通して、個々人が日常において経験する「民族」に迫りながら、「多様性」の内実を解明することを試みている。</p> <p>本論文が有するもう一つの意義は、民族実践の記述方法の刷新である。民族経験が多様化するなかで、在日朝鮮人の連帯はいっけん解体の一途を辿っている。しかし、民族差別は、決して在日朝鮮人個人にではなく、あくまでも民族集団に対して向けられているものであり、したがってそれに対する抵抗は、「民族」を単位としてしかありえない現実が存在する。そのことを前提にするならば、従来の連帯に代わる、在日朝鮮人の民族経験に即した新しい共同性のかたちが必要があるだろう。そこで本論文では、個人による民族経験への対処のあり方(民族実践)に着目し、それを起点とし、「開かれた共同性」を実現するためのコミュニケーションのあり方、あるいはその基軸に据えられるべき普遍的な原理が何かという問いかけを基軸とした新たな方法的枠組を検討している。</p> <p>第1章では、事例を検討していく前提として、〈私〉のポジショナリティと研究方法に言及した。本研究は「在日朝鮮人による在日朝鮮人研究」であり、それゆえ「当事者研究」とみなされるかもしれない。〈私〉自身もまた、研究を始めた当初は、「当事者」性に立脚することに研究遂行上のメリットを見出していた。しかし、インフォーマントとの「出会い」を重ねるなかで、「当事者」性や「当事者研究」というスタンスが、かれ／かのじよらの経験を理解し記述していくことの妨げになることを知るに至った。ここでは、そうした〈私〉の経験を辿りながら、「当事者」というスタンスが孕む問題点を明らかにしたうえで、「個人」に立脚する研究方法の可能性について言及した。</p> <p>第2章から第6章にかけては、在日朝鮮人の語りの理解を通じた民族経験／実践の記述が試みられる。</p>			

まず第2章では、外国人登録法上の国籍表記である朝鮮籍を保持する2名の在日朝鮮人青年の語りを事例とし、朝鮮民主主義人民共和国との心理的紐帯の一切を断ち切るか、あるいは常にそのシンパサイザーとしてふるまうかの、いずれかの選択を強要するような外在的まなざし（「ナショナル리티の強制力」）を拒否・回避すべく、朝鮮籍への意味づけを含め、「ナショナルなもの」に対していかなる態度をとろうとしているのかを描出した。かれらは、入居拒否という直接的な被差別体験や、国籍を変更する同年代の在日朝鮮人たちの姿を通して、日常的に「ナショナル리티の強制力」の存在を経験していた。また、朝鮮籍を維持するという営みは決して固定的なものではなく、場面に応じた、抵抗・拒否・回避の態度が入り混じった「戦術」的实践によって、「強制力」に柔軟に対応するものであるということが明らかになった。

第3, 4章は、「民族」とジェンダーの交叉点に存在する問題に焦点を当てる。

第3章では、渡韓した20代前半の在日朝鮮人2名の語りを分析した。両者による渡韓は、単に語学の習得や本国文化への接触を目的としたものではなかった。かれ／かのじょらにとっての民族は、民族差別と真っ向から闘う勇敢さや、特定の性役割を強いるような「家父長制的民族主義」として体験されており、それが「渡韓」の背景にあることが明らかになった。両者はそうした民族共同体から逃れ、韓国で、在日朝鮮人社会に再度コミットする可能性を模索していた。両者の語りが示唆する、かれ／かのじょらがコミット可能な在日朝鮮人社会とは、従来「被差別者・被害者」という立場性に全面的に依拠し、民族闘争における性別役割分業を引き受けることによってこそ、社会内部で主体的に振舞うことができ、あるいは他の在日朝鮮人との係わり合いをもつことができるような集団規範が根本から見直され、それぞれが「共役不可能な個人」として存立することが許容されるような社会であった。

続く第4章では、在日朝鮮人と日本人の「国際結婚」を事例とし、歴史的断絶に伴う困難に直面しながらも、日常における民族実践——周囲の在日朝鮮人との民族的紐帯を維持し、祖父母との接触などを通して獲得した歴史性を継承すること——を目指す様子を明らかにした。ただし、「継承」とはいつても、実際には、「国際結婚」家族を営んでいくうえでの葛藤を回避するための独自の「民族」観が構築されていた。また、彼らは、日本人配偶者とのあいだで対話を重ね、日本人と在日朝鮮人という関係性を超え、民族を实践していくことの意義を共有するに至っていた。ただし、民族をめぐる摩擦を乗り越えたあと、両者の関係が家父長主義的なものへと変転しつつあるということが、同時に明らかになった。

第5, 6章では、個人による民族実践をつなぐ共同性はいかにすれば生起するのかが検討される。

第5章では、在日朝鮮人と日本人のあいだに生まれたいわゆる「ダブル」が、日常生活において、在日朝鮮人からは「不純なる者」として、日本社会からは「在日朝鮮人」として排除・周縁化されるような状況をいかに体験し、それにどのように対処してい

るのかを明らかにした。たとえば、語り手の一人は、在日朝鮮人の被害性が強く意識されるような場面で、「ダブル」としての立場性が加害と被害の「大きな物語」の文脈に回収されてしまうことに対して、加害と被害の歴史の双方を、「過去の苦痛と死に対して自分が何もすることができないという絶望」の次元で感受することで、加害と被害の二分法を拒否しつつ、歴史における主体性を獲得しようとしていた。このような実践は、特定の категория に拠らない共同性の可能性を指し示すものとして捉えることができるものである。

第6章では、「対話の成立条件」に関する議論の精緻化を目指し、在日朝鮮人問題に携わる者どうしによる、問題に取り組む際に持つべき視点や方法を論点とした論争を概観しながら、異なる立場にある者どうしの有機的な対話はいかにして成立しうるのかを検討した。その結果、この論争は、非対話的な硬直した言葉の関係に陥ってしまっていることが明らかになった。その要因は、一方の語り手が、論争の相手個人に対してではなく、日本人と朝鮮人の関係を規定するパターンとしての「二者択一思想」に向けられた点や、あるいは、対話的關係を成立させるための流儀・作法として行われる自己の語りや、一種のアイデンティティ・ポリティクスとして理解してしまっている点にあった。ただし、このように膠着したやりとりのなかにも、category に依拠し、なおかつ category に向かって語ろうとする相手に対し、「個人」に立脚し、詳細に自己を語ることを促すような言葉がみられた。このような語りは、自己と他者とが、それぞれ立場の交換が不可能な存在としてリアリティを共有する空間としての公共的領域を形成するための具体的実践として捉えることができる。

終章では、以上の議論を、「民族経験／実践の個人化」の視点から整理・再検討した。現代社会においては、「集合的運命」を共にする人びとのあいだで形成され、生存維持を保障する役割を担ってきた伝統的な共同体が脱伝統化されつつある。しかし、人びとはなお、完全に制度に組み込まれ、それに依存しなければ生活できない状況に置かれており、「伝統」とは異なる、新たな拘束性と強制性が生み出されている。この点、本論文でとりあげた在日朝鮮人の民族経験／実践のあり方もまた、伝統的民族観からはもはや捉えきれない実に多様なものであったが、それらはいまだ被差別体験や親世代との歴史的連続性によって強く規定されていた。つまり、在日朝鮮人の「多様化」は、そうした民族経験／実践がきわめて個人的な文脈で捉えられるようになった結果として生じるものであると言えよう。また、「個人の生きづらさへの対処」として現れる民族実践を結ぶ共同性は、「不安による連帯」として構築されうる。それが排他性を内包しない開かれた共同性として創造されるためには、不安の道德化によって生まれる善悪の価値基準に常に留保をつけ、「根源的社会的不安」を辿るような思考回路を担保しておく必要がある。この点、第5、6章でみた在日朝鮮人個人による詳細な自己語りの実践は、「根源的社会的不安」を引き受けるための具体的方法を考えるうえで、重要な示唆を与えるものであると言えよう。

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、これまで在日韓国・朝鮮人に関するアイデンティティ研究のなかでも、ナショナリズムと一体化したエスニズム（エスノ・ナショナリズム）の観点から一面的にとらえられることが多かった「朝鮮籍者」のアイデンティティをとりあげ、その内部の多様性と開放性のダイナミズムを実証的に分析した独創的な論考である。

また本論の第5、6章は、P・ラビノウやV・クラパンザーノなどが挑戦した「対話法」にもとづく「実験的民族誌」を、在日コリアン研究において初めて本格的に実践した貴重なモノグラフの実験でもある。

在日コリアン研究に対して本研究が成し遂げた貢献は以下の3点に要約できる。第一は、「在日」アイデンティティをめぐる「本質—構築論争」に対する理論的貢献である。1990年代までの「在日」アイデンティティに関する主要な議論は、従来の民族性を生得的で本源的な実体にとらえ、それを肯定し尊重する方向に収斂してきた。それに対して、この時期、欧米の人種・民族関係研究に触発され「在日」アイデンティティの本質主義化を否定し、異種混交性（ハイブリディティ）や遊動性（ノマディティ）をキーワードに、アイデンティティの構築性に焦点をあてるいわゆる「脱構築」的研究が支配的になった。著者は、こうしたポストモダンのアイデンティティ研究が出現してきた歴史的意義を評価しながら、浮遊性を過度に強調する危険性（思考停止）を厳しく批判し、いっけん本質主義的にみえるアイデンティティの内部にあるダイナミズムの実証的な解明こそが重要であると指摘した。金泰泳などに代表される「在日」アイデンティティの構築性と状況選択性に力点を置く研究はたしかに、本質主義的な民族観や血統のイデオロギーを解体することによって、たとえば、「日本籍者」や「ダブル」を在日朝鮮人社会から排除してきた構造を暴露し批判することに成功した。しかしながら、著者は、これらの研究が本質主義批判に傾倒するあまり、異種混交性を「不純なもの」として排斥せざるをえなかったマイノリティの「痛み」を分析の俎上に乗せることができなかったこと、さらに日本籍者や「ダブル」を排除してきた在日朝鮮人運動に携わる者たちを、「ナショナリスト」として一方的にカテゴリー化することを自戒をこめて批判する。その批判の先に、構築性と「本質性」を接合させる新しい「在日」アイデンティティ論を提示したのである。

本研究の第二の意義は、「朝鮮籍」者のアイデンティティ生成について、その共同性と開放性のメカニズムを明らかにした点である。「朝鮮籍」者は、「北朝鮮支持者」と同義化して現代日本社会においてもっとも周縁化され負のスティグマを付与されてきた。ときには暴力的排除の標的にもされてきた。従来、「朝鮮籍」者のアイデンティティは、こうした厳しい差別と抑圧の制度と社会意識に抗して生きるために、ナショナリズムとエスニズムを混合した形で本質化されてとらえられてきた。本研究は、こうしたマジョリティからの迫害に抵抗するための集合的アイデンティティの必要性と、それを単純にナショナリズムとエスニズムに還元させない実践の双方に焦点を当て

て、両者の接合の様式を考察する。具体的には、「朝鮮籍」者と日本国籍者との国際結婚の当事者、「朝鮮籍」者の民族団体の活動家、「ダブル」、日本国籍者との「フォーラム」への参加者など、多様な属性と背景をもつ人びとに対して、長期にわたる「ディープインタビュー」と「参与観察」を繰り返すことによって、そこで生成され解釈される帰属意識や共同性の感覚を丁寧に検証していった。そこでは、これまで本質主義的民族意識（文化）の負の側面として批判されてきた、たとえば家父長制的ジェンダー役割についても、個人的な改変や再解釈を積み上げることによって、結果的に「民族文化」言説を保持しながら実質的な「文化解体」を実践していることを明らかにした。本論はその過程を「日常生活に根ざした権力性を伴わない開かれた連帯」の可能性として定式化してみせる。

本研究の第三の意義は、エスノグラフィに関わる方法論的なものだ。1990年代半ば、それまでの民族誌が暗黙的に前提としていた政治性と「書く（表象する）ことにまつわる」権威が鋭く批判された。このエスノグラフィ批判の思潮のなかでは当然、エスノグラファー自身のポジショナリティが自省的批判的に問い直されることになった。この過程で誕生したのが「実験的民族誌」と総称されるさまざまな試行であり、そのなかの一つが第三人称を使用しない「対話法」だった。著者は第5、6章（とりわけ6章）において、日本国籍者と「朝鮮籍」者が共同する「場」を題材に「対話」法による民族誌記述を試みる。在日朝鮮人をカテゴリー化する議論は多くの場合、あらかじめ承認された言説の繰り返しによって対話としては不発におわるのだが、自身の語りが一つのカテゴリーに収斂されないような形で自己開示を行う発話は、相手を緊張した相互作用・闘争関係へと誘うことによって対話的な世界を切りひらく。著者は、ここに「朝鮮籍」者のアイデンティティの開放性の萌芽を確認したのである。

以上、本研究は、「朝鮮籍」者のアイデンティティのなかに、抑圧に抗するための集会的「カテゴリー」ではなく、カテゴリー化の罫を逃れながら開放的共同性へと繋がる回路を見いだすことで、「在日」研究に新しい視座を提供することに成功した。

とはいえ本研究に問題がないわけではない。第一に、カテゴリー化や権力作用から自由な共同性の創出について、現代のアイデンティティ研究のなかで蓄積されてきた批判と疑問についての目配りや吟味が十分なされていない点、第二に、「朝鮮籍」者の多様性を代表する事例が適切なものかどうかについて、本論の主張に反する事例も含めた検討が欠けている点、第三に、実験的民族誌の「対話法」の方法論的かつ批判的検討が十分とはいえない点などは今後の課題である。しかし、こうした弱点も本論のもつ基本的な意義を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2012年5月9日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。